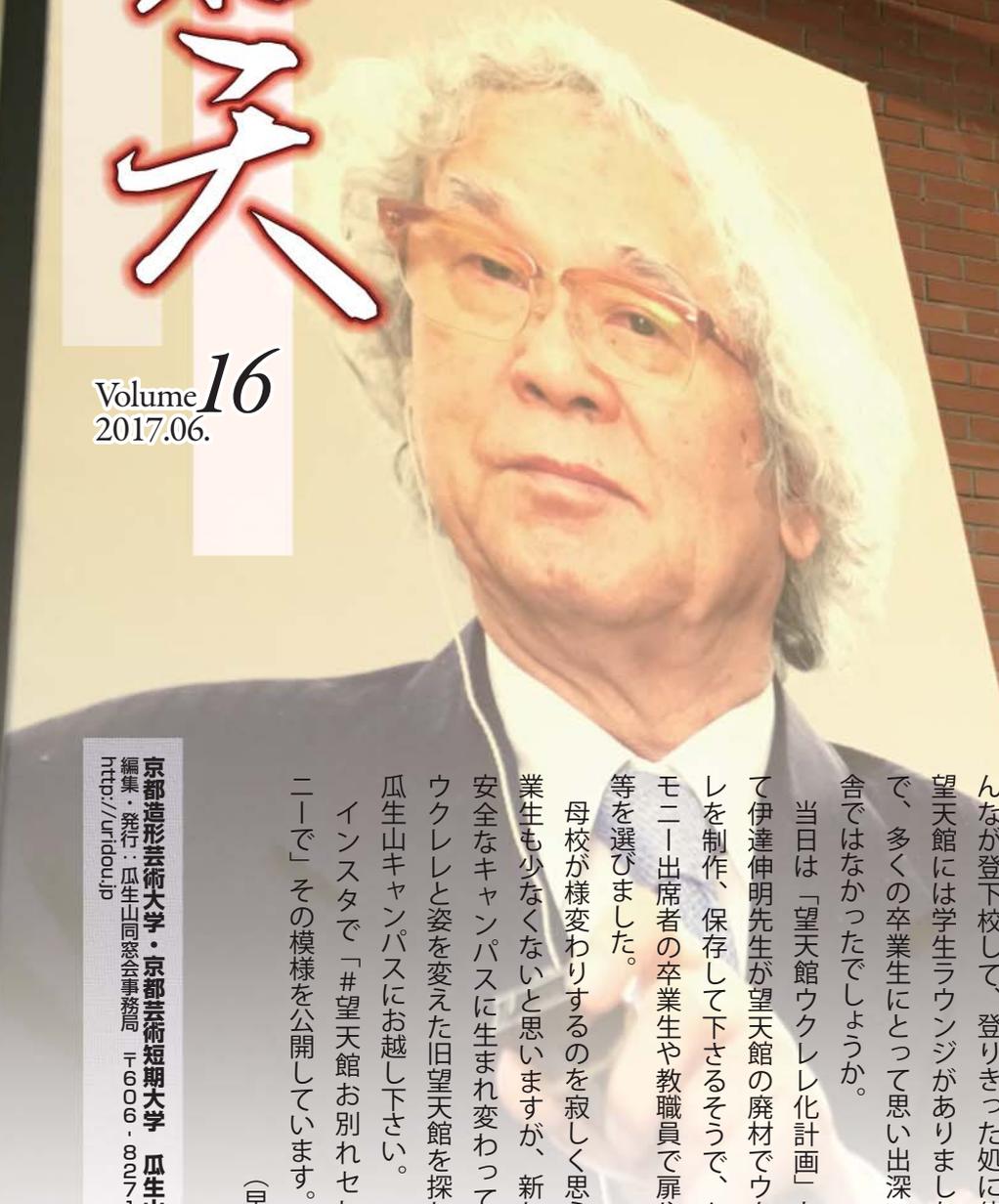


望天館

# 望天

Volume 16  
2017.06.



## 望天館お別れセレモニー

開学当時一九七四年から私達を見守って  
てくれていた望天館が今年建て替えにな  
ると聞いて、ぜひ卒業生にもその最後に  
立ち会わせて欲しいとお願いした事から  
お別れセレモニーを大学が開いてくれま  
した。

私の学生時代、白川通からあの坂をみ  
んなが登下校して、登りきった処に佇む  
望天館には学生ラウンジがありましたの  
で、多くの卒業生にとって思い出深い校  
舎ではなかったでしょうか。

当日は「望天館ウクレレ化計画」とし  
て伊達伸明先生が望天館の廃材でウクレ  
レを制作、保存して下さるそうで、セレ  
モニー出席者の卒業生や教職員で扉や柱  
等を選びました。

母校が様変わりするのを寂しく思う卒  
業生も少なくないと思いますが、新しく  
安全なキャンパスに生まれ変わっても、  
ウクレレと姿を変えた旧望天館を探しに  
瓜生山キャンパスにお越し下さい。  
インスタで「#望天館お別れセレモ  
ニー」その模様を公開しています。

(早野)



◆目良：今回の師弟席は、徳山理事長をお迎えして……。さてなに話しましょう？

◆徳山理事長（以後、理事長）：緊張しますね。こんなふうにお二人と改まって話すことあんまりなかったな。いつもどんな話してらる？

◆早野：理事長の昔のお話で、我々が知らない話とか衝撃の事実みたいな話もお聞きしたいです。先代理事長のお話もぜひ。過去の師弟席では、お店でお酒を飲みながら掲載できないお話ばかりされる先生もいらつしました。今日は場所が理事長室なので、飲むならワインが似合いそう。

◆理事長：ごめん。水しか用意してなかった。お茶ならなんとかなる。

## 跡を継いだらどうなのよ

◆早野：最近はずっかりキャンパスが綺麗に整備されました。私が学生の頃は、人数規模も小さくて、整備されるとは言いえない環境でいかに楽しむかといったやんちゃな雰囲気が強かったです。

理事長は外へ勤めに出られてた時期もあり、そこから芸術系の大学経営へ転身されたという印象があります。跡を継ごうと思ったのはいつごろでしたか？

◆理事長：一般企業を辞めてなんで大学に、ってこと？

◆目良：継がないと考えるようになったのは、社会人、銀行員として勤めながら現実的になっていった感じかな。父からは継げとかいう話は直接なかった。父のやっつること、将来やろうとしていることがすごい事なんやなと、社会に出て現実として腹に落ちて、大学に来ることにした。最初の仕事は入試課での学生募集担当。とにかく目の前の仕事をこなす日々で。

◆目良：大学が拡大していく前の頃ですね。辛いという話はなかったですか？

◆理事長：事務の作業だけでなく、全国いろいろなところに行って父兄と話すような仕事も多かったですけど、話すことは好きな

方で苦にならなかった。当時から父兄に「大学に入ったら就職はどうなりますか」とかよく聞かれたな。相手を説得するよな場面も多くて。やっぱり就職が親御さんは一番心配ですよ。けど大学卒業して食べるか食えへんかなんて、どんな大学出てもしっかりするわけじゃない。

◆早野：確かに、入学時点でそんなこと言われてもねって話ではありませんね。

◆理事長：そういう質問にも、いろいろなお話をしましたね。けど一番思うのは、大学4年間で芸術的素養を磨いた人は、社会で強みを放つ可能性がすごく有るということでした。自分は芸術的センスは持って生まれなかったですが、どんな業種、どんな仕事でも、必ずアイデアを出し合って、現状を打破する発想が求められる場面がある。大学で創造的な作業に打ち込んだ人は、ほぼどんなジャンルの仕事でもその能力が活かせると思うんです。だから、とにかくちゃんと単位とって大学来る子がいい学生という風潮に、最近完全にシフトしてる事が気になってる。

◆目良：私の学生当時は色んな意味で学生も大学もワイルドでした。

◆理事長：女子のつなぎの子、普通にいましたね。今だとウルトラファクトリーに行けば会えるけど、大学で着替えてる。昔は家から着て大学来る学生が多かったですよ。

◆早野：私もつなぎ着て大学着て、そのままラウンジにいたみたいな学生でした。

◆目良：短大なのにタバコの自販機が学内にあったのも昔の話ですね。

◆理事長：望大館の横だったか、手洗いの横あたり。目良：いまはどこも禁煙で昔がめっちゃくちや寛容過ぎたのかも少し残念。最近世の中細かくて窮屈な事が増えてしまってます。

◆理事長：そう。こういう時代だから、なおさら芸術の可能性は大きいなという思いがあります。よく、これもが亡くなる事件があると、防犯カメラだキッズ携帯だと監視システムの技術の話になりがちだけど、それだけだとおそろしく社会の問題は解決できないだろうという思いがあった。世界の平和とか、最後の最後は僕らの芸術の仕事に、解決策が秘められているという思いがある。

◆早野：文藝復興の中で、先代理事長も同じこと仰っていますね。

◆理事長：先代理事長も、それはおそろしく自然に、本当に大それた意味でなく素直にそう考えていた事と感じます。とにかく大学の仕事にのめり込んで、ほぼ家にない人でしたけど。

## 「造形大イズム」継承への思い

◆目良：私はこれまでなんとなく、理事長が何かのタイミングで決意して、こう急に考え方を先代寄りにハンドル切ったような格好かと思ってました。キャラクターは全然違ってお二人なのに造形大の「イズム」を完全なまでに受け継いで表現しているらしいから。

◆理事長：先代理事長は、最初から父親という部分の子供に出さない人でしたから、親父の印象も、先代理事長の仕事への共感み

たいなものも、最初から何も変わっていないんです。

◆早野：それだと家庭は？ お母様は大変だったのでは。

◆理事長：うちでは母が父親の役もやりました。父が頑張ってくれているおかげ、という意味での父親への感謝はありますが、父としての存在感よりも理事長、それへの感謝と表現したほうがしっくりくる。

◆目良：確かに、前理事長からいただいた本「藝術立国」に、お母様のことが書かれました。たいそう肝っ玉の座ったお方だったよですね。

◆理事長：そう。うちはお袋がすごいんです。

◆目良：とても興味深い本でした。あのど根性とか情熱をどう身につけたかを追体験じゃないですが、ソクソクするような楽しい本です。

◆理事長：先代理事長のやろうとしてきたことは、今だつたらわかるんですが、当時はたいそう周りを振り回していました。お袋からの視点で見たら、また全然違つ話だったと思います。

◆早野：そちらを本にした方が売れるかもしれませんね。

◆目良：朝ドラになりそう。ゲゲゲの女房みたいなね。

◆早野：先代理事長は、杖をついて歩く速度がどんどんゆっくりになられても、新しい構想について話されると、途端に情熱とエネルギーがみなぎって見違えるようでした。

◆理事長：学生のことが本当に好きで、好きだから本気で怒鳴ることも昔はよくあった。

◆早野：早野さんのような、ものをはつきり言う学生は大好きだったよですね。

◆早野：あの杖で学生の背後から、ツンツンと肩を叩いて声をかけてくださったりしました。入学式の歓迎の辞で、入学式終わってから耳元でささやかれました。「良かったよ」って褒めていただいた。

◆理事長：経営側の人間なのに、いつも学生の近

師弟席  
2017  
RESERVED

見開き対談  
徳山豊  
理事長を  
訪ねる



くに居たかったんでしょね。

◆早野：そうですね。理事長がストラップになる大学なんて聞いたことない。

◆理事長：こめんあれは僕が作ってん。最新バージョンには当たり前くじと理事長格言入りで。当たるとカフェのソフトドリンクの券がもらえます。

◆目良：それいいですね。最新バージョンをチェックしない。

◆理事長：格言を入れたのは、この大学の建学の精神の発信をしよう、ちゃんと真面目な思いがあるんです。今年は特に都をどりで4万人以上のお客さんが来ますから。他の催しで4万人も人が来るものはそうない。単なる会場貸しではなく、京都造形という大学を知ってもらおう機会にしたいし、何より今年の都をどりは芸大でおもしろかったといってもらいたい。春秋座の舞台のすばらしさも知ってほしい。

◆早野：そうですね。劇場は猿翁さん監修ですよ。設備とか舞台の奥行きとか、照明なんかもばっちりでしょう。

◆理事長：そう。今回会場をお貸しして初めて気づいたのは、舞台衣装の着物がものすごく映えること。ものすごく綺麗に見えるんです。やはり照明が、着物の色柄の映え方が全然違うんですよ。

◆早野：甲部歌舞練場と違って新鮮でしたよね。

## 大学の未来・イズムの発展

◆目良：都をどりがうちの大学で開催の件、メディアにたくさん出てとても誇らしいニュースでした。

◆理事長：都をどりの件など、そう言った目立つ取り組みに苦言を申す方も一定おられます。自画自賛だとか、目立つことばかりとか、新しい建物たくさん建ててとかね。

◆早野：卒業生には、大学の風景が変わりすぎて疎外感を感じていると言っている人もいます。

◆理事長：雰囲気が変わりすぎて悲しいと言っている意見もわかるんです。けど、外部の前向



徳山 豊 理事長



早野 素子  
(大学：彫刻 94年度卒)



目良 義夫  
(短大：インテリアデザイン 86年度卒)



きな評価もぜひ素直に受け止めてほしいな。先代のイズムみたいなことも、大事にして受け継いで、どう時代にあわせて飛躍させるかは、かなり大事にやってきましたつもりです。卒業生にはまたここに帰ってきて、今の大学の姿をぜひ見て応援してほしい。

◆目良：イズムの点では、今の尾池学長は芸術と全く違うジャンルのご専門ですが、学生にもものすごく気安く話しかけられて、いろんな場にも来てくださるところや、学生に寄せる愛情、いたすらつ子みたいなキャラクターも、まるで先代理事長のようなところがある方で。

◆早野：本当に。学生との気持ちの距離の近さも、先代に通じるところがあると感じます。

◆理事長：そうですね。だからこそ、大学とのあの近い距離感、学生に近しい愛情を示すこととか、学生が大学にコミットできるしくみは、大学全体で特に大事にしていきたいことのひとつです。時代の移り変わりもあって、今の学生は、距離が近すぎるのは敬遠しがちですが、時代に合わせつつも、変わらず残していきたい。先日の望天館のお別れセレモニーも、素敵な時間でした。

◆目良：望天館の「学生ラウンジ」は、学生の溜まり場でしたから、とても象徴的な思い出のある建物。取壊しの知らせを聞き、お別れの場を持ちたいと強く感じました。

◆早野：お別れセレモニーで理事長が「この場に先代理事長がいたら、漬すのやめよかつ

て言つと思えます」とお話しされた時、声が先代と本当にそっくりで。先代もあの場にきつとおられたと、そんな気がしました。

◆理事長：卒業生に関するものでは、昨年度初めて開催したホームカミングデーは、尾池学長のアイデアがきっかけです。卒業生を大事にしようよとか、朝食券配布の取り組みも、すごくアイデア豊富で。着任から短期間で大学の理念に深く共感してくださっていることに感謝しています。

先代が僕に残してくれた唯一くらい有り難いなって思つものって尾池学長なんです。まさに宝だよ。

◆目良：ホームカミングデーや都をどりのようなこと、ちょっと大学に帰って見ようかなと帰って来ても疎外感を感じない大学にする為には、同窓会をどういうものにするのか、考えて作っていかないといいなと思つています。

◆目良：尾池学長にも、通信教育部の卒業生の同窓会加入率の低さなど、データを見ていち早く気づいて学園の会議で指摘され、折に触れて同窓会を気にかけていただいています。

◆理事長：卒業生との関わりと言つ点では、個展補助以外の、もっといい支援がないのか、何かできないかは常に想いを持っていきます。卒業生の子弟の入学金免除も、お子さんを安心して送り出してもらえる大学

になれたと言つ想いがあったって、ようやくできたところもあって。とにかく、卒業生に恥ずかしくない、誇れる大学に育てていくことがまず大切だと思います。

◆目良：同窓会費のコスパがどうとかいう話ばかりだと寂しいことですね。

◆理事長：何かしてあげるとお金で釣るようなことじゃなくてね。ホームカミングのような機会、大学は昔と何も変わっていないなど、帰ってこれて嬉しいと言つ場にしてほしい。そうすれば在学学生も、こんな卒業生がいて、自分たちはどう見られているか知るでしょう。教員も職員も卒業生がどうしているか知って、仕事の仕方を考え直す。卒業生が大学に帰って来ると言つことは、そう言う機会になると思つています。

◆早野：同窓会会員限定の歌舞伎特別公演では、「嬉しい」と言つ声を多く聞けました。そう言う機会を今後も準備していきたい。

◆理事長：同窓生が「私卒業生なんです」と尋ねやすい窓口とかあったらいいのでは？今よりもっと同窓会が前にでると言つとか、ウエルカムな状態をつくるのが大切だと思います。

◆早野：学内にそう言ったスペースを設けることを検討いただけたら嬉しいですよ。

◆理事長：何か場があることはいいことですね。なんか昔の、表向きは喫茶店だけども実は探偵事務所ですみたいな、ちょっと面白い感じがあるといい。

◆目良：専用の古い公衆電話が置いてあって、受話器あげると同窓会に繋がるみたいな、いいですね。知る人ぞ知るという感じでしょうか。

◆理事長：少しワクワクするような、アクセスするための窓口があつて、今の大学のことを知ってもらえるようなことがあるといいですね。

◆目良：本当に、カフェ・ベルデイの一角とかお借りできませんか？ 入り口の横とか？

〈終わり〉





2017  
年度

## 第一部 総会

日時 2017年7月9日(日)  
午前10時30分開会(午前10時受付開始)  
会場 京都芸術デザイン専門学校 希望館5階 KI-51教室

瓜生山同窓会、  
総会を開催致します

## 第二部〈総会連動企画〉京都御所等皇室ゆかりの地を参観と懇親会

宮内庁京都事務所は、京都御所の春秋の一般公開及び事前申込手続きによる通年参観を実施していましたが、平成28年7月26日(火)より土日曜・祝日を含め一年を通して参観出来るようになりました。この機会に京都の顔とも言えるべき京都御所などをご参観いただき、大学で講師を務められている栗栖正博先生のお店、たん熊北店本店にて京料理をお召し上がりいただきます。是非ともご参加下さい。

- ・午後1時 大学前集合
- ・午後1時10分 大型タクシーにて移動
- ・午後5時 たん熊北店にて懇親会(京都市中京区西木屋町四条上紙屋町355番地 TEL:075-221-6990・5490)

第二部会費 ◎10,000円(定員25名先着順)

### 参加申込

◎瓜生山同窓会ホームページ『イベント』の総会企画のページから簡単にお申し込みいただくことができます。

FAXでのお申し込みも可能です。(同封の申込用紙をご利用下さい。)

今回は瓜生山同窓会会員に限らせていただきます。ご了承ください。

「イベント参加申込フォーム」からのお申込みの場合は必ず備考欄に以下の記入をお願いします。

- ・参加区分 第1部のみ or 第2部のみ or 両方参加をお知らせください

### 申込締切

◎6月30日(金) 必着

手配の都合上、定員に達し次第申込を終了させていただく場合がございます。

何卒ご了承くださいますようお願い致します。



卒業生応援サイト「卒業生のいるお店」が公開されました。お店や商品の魅力だけでなく、卒業生の方の想いや考え、出会いなどの物語も発信していきます。

## 「卒業生のいるお店」卒業生応援サイト公開!



サイトアドレス：  
<http://sotsu-omise.kyoto-art.ac.jp/>



## 編集後記/会長挨拶

平成29年度より1期2年、会長を務めさせていただく環境デザイン2期生(95年度卒業)の冨家です。どうぞよろしくお願いいたします。菱田前会長が10年背負われた会長職が私のところに鉢が回ってきたといえればそれまでですが、気安く受けられるものでもなくまた安易に断れるものでもない判断の中、お引き受けすることになった経緯にはご理解いただきたいと思います。

昨年度、瓜生山学園創立40周年の大きなイベントが開催されました。もう40年かと喜びもありますが、まだまだ40年しか経っていない学校なのです。通信学部の年齢構成は様々ですので別ですが、通学部においては造形大初年度の卒業生の年齢の中心層は40代前半。初の卒業生を送り出して以来、働き盛りの世代で同窓会は黎明期から成長期を経て成熟期に入る20年先までは我々の世代で運営していかなくてはなりません。新設校を選んで入学した者の宿命と思っています。

今まで庶務として本部の活動に携わってきましたが、同窓会活動がどのようなものか深くご理解いただけている方は卒業生総数からすると少数だと感じています。同窓会活動とは何なのか、その存在意義が不明のままでは我々役員を担っている者も頑張れる原動力を持たせませんし、会員の皆様においても何のために参加をしているのかわからないといったところではないでしょうか。同窓会の現在進行形での使命は1番に同窓会に関心を持ってもらうことです。2番に同窓会同士の交流しあう場を設けること。3番に同窓会会員の制作活動の支援と考えています。40代の同窓生の今までの実績や社会的影響力が同窓会同士でのネットワークとなれば大きな魅力的なコミュニティになります。これは10年前では実現できなかったことです。今後20年かけて同窓生も成熟期にはいりこのコミュニティが完成すれば、新たに卒業をしていく未来の若い同窓生にとって多くの魅力を持って迎えられる未来像があります。

多くの同窓生には入り口をこの会報誌「蒼天」を受け取るところから関わっていただき、ご自身の力を同窓会のために僅かでもいいので提供していただけることを願っています。またこの編集後記を読まれた皆様には周囲の同窓のご友人に同窓会に関心をもってらえるようお声がけいただけると幸いです。

瓜生山同窓会会長 冨家裕久